

本調査研究の概要

- 全国学力・学習状況調査は、児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、全ての教育委員会や学校において、調査結果の活用を通じた教育施策や児童生徒一人一人への教育指導の恒常的な改善・充実に努めることを目的として実施している。
- この目的を達成するためには、大学等の研究機関等の専門的な知見を活用して、全国学力・学習状況調査で得られたデータ（教科調査の解答データ、質問紙調査の回答データ、等）について高度な分析を追加で行うことが重要。
- このため、文部科学省においては、平成21年度以降、委託事業「学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」を毎年度実施し、成果報告書を公表している。

<過年度の調査研究（例）>

- ・効果的な指導方法や取組について
- ・教育委員会や学校における調査結果の分析・活用手法について
- ・児童生徒の社会経済的背景（SES）と学力の関係について

<令和5年度の調査研究>

令和4・5年度全国学力・学習状況調査で得られたデータについて以下の追加分析を実施。

➡ **次ページ以降で
詳細を紹介**

A. 令和4年度全国学力・学習状況調査の理科の結果を活用した専門的な分析

- ・理科教育における特徴的な取組等に関する分析
(受託者：福島大学)
- ・我が国の児童生徒の理科の学力や学習状況に関する傾向等の分析
(受託者：株式会社エーフォース)

B. 令和5年度全国学力・学習状況調査の英語の結果を活用した専門的な分析 (受託者：横浜国立大学)

C. 令和5年度全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙調査（うち、挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感、幸福感等）の結果を活用した専門的な分析

(受託者：三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社)

令和5年度「学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」（専門的な知見を活用した高度な分析に関する調査研究）研究成果（概要）

文部科学省では、全国学力・学習状況調査の目的の達成に資するため、大学等の研究機関等の専門的な知見を活用した高度な分析に関する調査研究を委託にて実施。令和5年度は、理科、英語、児童生徒質問紙調査（うち、挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感、幸福感等）の結果の追加分析を実施。

A. 令和4年度全国学力・学習状況調査の理科の結果を活用した専門的な分析

・理科教育における特徴的な取組等に関する分析

（受託者：福島大学）

1. R4全国学調「理科」で特徴ある結果を示した学校の抽出

思考・判断・表現を問う問題の
正答率が高い学校



「学習に対する興味・関心や
授業の理解度等（理科）」で
肯定的回答の割合が高い学校

※抽出の際、学校規模や社会経済的背景の影響等にも留意。

2. 1. の学校に対するアンケート調査の結果

・理科の探究のプロセスの3段階のうち①を重視する学校の割合が高い。

①
課題の把握（発見）

②
課題の探究（追究）

③
課題の解決

・理科の授業づくりや教材研究に関して、教員間で気軽に相談し合っている学校の割合が高い。

3. 訪問調査の結果

小学校

- 児童が見いだした問題を大切にしている。そのことが、自分事の問題解決の実現につながっている。
- 予想や解決方法を考えたり、観察、実験後に考察したりする際においても、自分の考えをしっかりとどうとすると高い意識が醸成されている。

中学校

- 小学校での学習規律や指導のよさを維持発展させ、理科の単元の特徴を踏まえ、生徒の主体性が生じるように工夫して授業を構想している。
- 探究の質を高めるため、必要性を見極め、ICT機器の効果的活用を試みている。

・我が国の児童生徒の理科の学力や学習状況に関する傾向等の分析

（受託者：株式会社エーフォース）

1. 日本の児童生徒の理科の学力の経年変化

・過去4回（H24,27,30,R4）の全国学調「理科」の結果によると、この期間で**小6・中3の理科の学力に実質的な向上や低下は見られない。**

※この傾向は、国際的な学力調査であるPISAやTIMSSの長期トレンドとも整合する。

2. 理科の学力の男女比較

- ・全国学調「理科」平均正答率については、**女子の方が男子より高い。**
- ・PISAやTIMSSの日本の平均得点については、**男子の方が女子より高い。**

※ただし、いずれも実質的な差があるわけではない。

3. 教科間の相関の男女比較

- ・全国学調において「ある教科の正答率が高いと他の教科の正答率も高い（逆も然り）」という傾向は、男子の方が女子よりわずかに強い。

4. 理科に関する質問紙調査の回答傾向の男女比較

- ・「理科の勉強は好き」「将来、**理科や科学技術に関係する職業に就きたい**」という肯定的回答の割合は、**男子の方が女子より高い。**

※PISA2022における「理科は、大好きな教科の一つである」の回答傾向も同様。

B. 令和5年度全国学力・学習状況調査の英語の結果を活用した専門的な分析 (受託者：横浜国立大学)

○「話すこと」「書くこと」の力の育成が課題

自分の考えや意見を書いたり、目的場面状況等が設定された中で、やり取りをしたり、意見と理由を述べたりする英語力がまだ十分に習得されていない。

⇒発信技能（話すこと、書くこと）の育成が課題。

○英語力向上に有効な取組等

以下のような取組が効果的。

- ・授業内では言語活動を多く行う
- ・授業外では日常的に英語を使用する機会やICT機器を活用して英語を話したりする練習を行う機会を増やす

また、英語への興味・関心、理解度も英語力向上に影響。

- ・授業の内容がよくわかる
- ・英語が好きである
- ・将来の目標として積極的に英語を使用する生活や職業につきたい

○各生徒の英語力に応じた指導が効果的

○英語力による「話すこと」「書くこと」の無解答率

英語力が高い層：「書くこと」より「話すこと」の無解答率が高い。
英語力が低い層：「話すこと」より「書くこと」の無解答率が高い。

⇒話す意欲を大事にしつつ、より正確に伝わるような指導が必要。

○社会経済的背景（SES）と英語力の関係

SESが低い場合でも、言語活動が行われていたり、英語学習の興味・関心や授業の理解度が高かったりする場合は、英語力が高い。

○SESが低く英語力の高い学校の英語授業

やり取りを中心とした授業展開が多く、言語活動を中心にしつつ、語彙や文法事項などの正確さに焦点を置いた練習が豊富。

C. 令和5年度全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙調査（うち、挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感、幸福感等）の結果を活用した専門的な分析

(受託者：三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社)

※「主・対・深」：主体的・対話的で深い学び
「総合・学活・道徳」：総合的な学習の時間、学級活動、特別の教科道徳

1. 「主・対・深」「総合・学活・道徳」×「自己有用感等」の関係性

- ・「主・対・深」「総合・学活・道徳」の取組状況
 - ・児童生徒の「自己有用感等」
- } の間に正の相関

2. 1. の相関への社会経済的背景(SES)・学力の影響

1. の相関はSES・学力の高低に関わらず見られる。

⇒SESや学力が低い層の「自己有用感等」にも、「主・対・深」「総合・学活・道徳」は一定程度有効な可能性がある。

3. R4とR5の児童生徒の取組状況の変化による分析

R4年度からR5年度にかけて「主・対・深」「総合・学活・道徳」の取組状況が変化した学校では、児童生徒の「自己有用感等」も変化した可能性が考えられる。

【解釈の留意点】

- これらの分析結果は、児童生徒の「自己有用感等」の回答と児童生徒の「主・対・深」「総合・学活・道徳」の取組状況の回答との間の相関関係を多面的に検証した結果である。
- いずれの分析においても、以下のような観測不可能な要因の影響を取り除くことはできていないという点には留意が必要である。
 - 児童生徒固有の性向（全体的に高めに回答する児童生徒と全体的に低めに回答する児童生徒がいる可能性）
 - 教員の指導状況（児童生徒の「自己有用感等」と児童生徒の「主・対・深」「総合・学活・道徳」の取組状況の回答をどちらも高めるような指導を行う教員がいる可能性）